

日本旧石器学会

ニュースレター 第3号

NEWS LETTER No.3  
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

特別寄稿

## 溝底遺跡および馬圈溝遺跡群

衛奇 (泥河湾猿人観察所副所長)

槇林啓介 (広島大学) 訳

溝底 (Goudi) 遺跡は中国華北泥河湾盆地の東端、東谷坨村西北の馬圈溝と呼ばれる自然溪谷の中に位置する。地理座標は、北緯  $40^{\circ} 13' 31''$ 、東経  $114^{\circ} 39' 51''$ 、海拔 824.57 m である。遺跡は、北東から南西に向かう約 60 m の正断層の上盤に露出している。上盤の地質は、河湖相堆積を組成する下部更新統泥河湾組である。東谷坨台地の頂部からの距離は約 160 m である。

泥河湾盆地は不規則な山間構造盆地で、北京の西約 150 km の桑干河やその支流の壺流河の溪谷に位置する。河北省西北部と山西省北部にまたがり、面積は約 9000  $\text{km}^2$  に達し、平均海拔は 1000 m 前後である。桑干河は西南から東北にむかって盆地を蛇行している。盆地内では後期新生代の地層が形成され、特に河湖相堆積は 1000 m 余りに達する。盆地の東端、東谷坨一帯の地層は流水による激しい浸食を受け、更新統の露頭の厚さは約 100 m である。その中に第四紀生物と人類に関する大量の情報が含まれている。

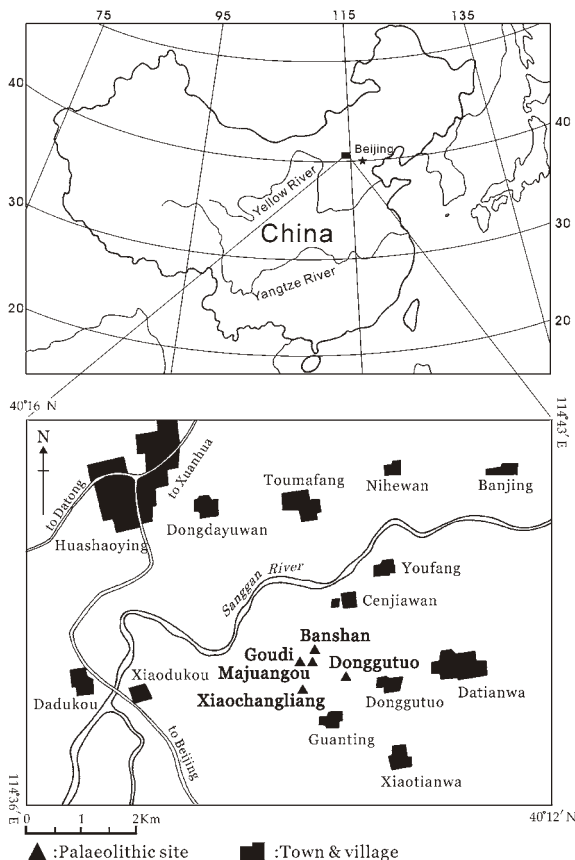


図 1 遺跡群の位置

泥河湾遺跡は、フランスの宣教師 Emile Licent (1876 ~ 1952) が 80 年前に科学的な調査を行ったことにより、世界にその名が知られるところとなった。1970 年代から、中国旧石器時代考古学者と地質古生物学者が次々と泥河湾盆地の調査研究を行い、更新統に属する地層から、多くの旧石器時代遺跡や新人化石を発見した。約 100 万年前の下部更新統の古文化遺跡は 20 数ヶ所あり、溝底遺跡はその中でも重要な発見のひとつである。

溝底遺跡は 2001 年 4 月 27 日に東谷坨村民白瑞花で発見され、その時地層断面から剥片 1 点と哺乳動物化石 2 点が採集されている。同年 8 ~ 9 月の間、泥河湾猿人観察所の衛奇が現場責任者と

して 12 m<sup>2</sup>を発掘した。厦門大学の蔡保全はその地層断面の上でも試掘を行っている。その後、河北省文物考古研究所の謝飛と李珺は、2001年から2003年まで継続的に3次の発掘調査を行った。発掘面積は約 100 m<sup>2</sup>である（写真1）。

溝底遺跡は2001年11月6日に中国社会科学院考古研究所の劉景の発表の中で命名された。石核 (cores)、剥片 (flakes)、断塊 (訳者注：分割礫か) (chunks)、簡単な調整石器 (modified pieces) を含む多くの石器と、大量の動物化石が出土している。予備歩的鑑定によると、動物群には、トガリネズミ属 (の一種) (*Sorex* sp.)、ハリネズミ属 (の一種) (*Erinaceus* sp.)、ナキウサギ属の絶滅種 (*Ochotona minor*)、オコトノイデス属の絶滅種 (ナキウサギ科) (*Ochotonoides complicidens*)、イツユビトビネズミ属 (の一種) (*Allactaga* sp.)、ハタリス属 (の一種) (*Spermophilus* sp.)、ヒメキヌゲネズミ属 (の一種) (*Phodopus* sp.)、モグラネズミ属の絶滅種 (*Myospalax tingi*)、エピシフネウス属 (の一種) (モグラネズミ科) (*Episiphneus* sp.)、クロメロミス属の絶滅種 (ハタネズミ科) (*Cromeromys gansunicus*)、アロファイオミス属の絶滅種 (ハタネズミ科) (*Allophaiomys deucalion*)、ミモミス属の絶滅種 (ハタネズミ科) (*Mimomys chinensis*)、プロラグルス属の絶滅種 (ハタネズミ科) (*Prolagurus praepannonicus*)、ミクロムス属 (の一種) (ネズミ科) (*Micromus* sp.)、シャルデノミス属の絶滅種 (ネズミ科) (*Chardinomys nihewanicus*)、食肉目の動物 (Carnivores)、ステップマンモス (*Mammuthus trogontherii*)、サイ科の動物 (Rhinocerotids)、シカ科の動物 (Cervids) などがあり、

またトリ類 (Birds) の肢骨やダチョウ類 (*Struthiolithus*) の卵片もあった（写真2）。

湖浜相の濃灰色砂質粉砂層から遺物が出土しているが、発見された標本は風化や腐蝕はしていない。石器の中には接合できるものがあり、最も多く接合できた資料には20点余りのものがある。石器組成には以下のような特徴がある。小型（長さ 50mm 以下）と幅広薄型（幅／長さ×100 ≥ 61.8；厚さ／幅×100 < 61.8）のものが主であり、摩耗は軽微で、石材は燧石を含む火山起源の角礫岩が多い。一般的には直接打法を用い、石器類型は単純である。動物骨格のなかには、明確な人工切痕が認められるものがある。これらの発見は基本的に原位置に残ったものであり、原始人類がかつ



写真1 溝底遺跡、馬圈溝遺跡と半山遺跡

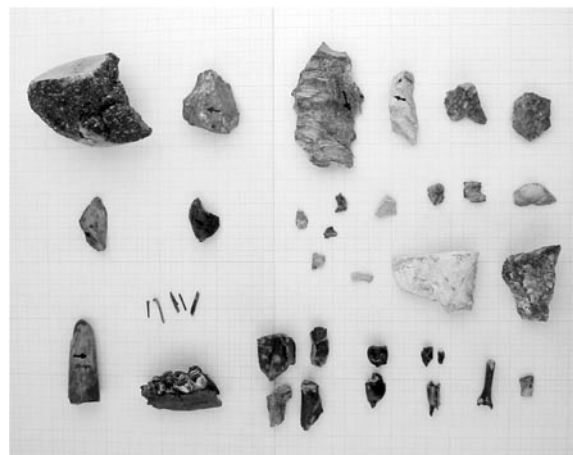


写真2 溝底遺跡出土の石器および動物化石

てこの場所で剥片を剥離したり石器を調整したり、または動物を解体し食物を調理したりしたことを示している。

地層と動物群から、溝底遺跡はだいたい下部更新統泥河湾組中部に属することが明らかになっている。2004年9月30日、中国科学院地質地球物理研究所の朱日祥が『nature』誌431巻において、古地磁気年代測定の結果を約170万年前と発表した。アメリカ、カリフォルニア大学バークレー校のDesmond Clarkは生前の2001年9月5日に衛奇に宛てた書簡で次のようなことを言っている。ユタ大学の「Frank Brownは、東谷坨(Donggutuo)遺跡はおそらく120～130万年前であり、謝飛が発見し発掘したさらに深い遺跡（馬圈溝(Majuangou)遺跡を指す）はオールドバイ・イベントの約180万年前よりも遅くはならないようであるという新しい情報を得た。」もし、Frank Brownの測定が正しいならば、馬圈溝遺跡の下7.2～7.7mの溝底遺跡は、すなわちオールドバイにおける正磁極亜期の下になるはずである。年代は195万年前になるはずで、あるいは200万年前にいたるかもしれない。

2004年12月、私が名古屋大学で講演した際、ある日本の教授から古地磁気年代測定の信頼度について質問され、信頼度は高くないと回答した。しかしいずれにしても、溝底遺跡は泥河湾盆地でこれまで公表された中で最古の旧石器時代遺跡であり、この事実はすでに共通の認識となっている。また、出土の象化石は日本の古生物学者河村善也と樽野博幸の研究によってステップマンモス(*Mammuthus trogontherii*)と同定されている。これは世界的に最古のステップマンモスの化石とされ、その発見は疑いもなく現生象への進化やその地域分布の研究のために重要な資料を提供した。

馬圈溝において発見された旧石器時代遺跡には、ほかに馬圈溝遺跡、半山(Banshan)遺跡、M c遺跡などがある。馬圈溝遺跡の発掘地点は溝底遺跡の東側、水平距離で10mのところである。同地点に正断層の上盤があり、海拔829.62m、位置は溝底遺跡より7.7m高い。石器組成は溝底遺跡のものに近い。動物化石の大部分は肢骨と歯の破片であった。鑑定できたものには、ゾウ科の動物(Elphantids)、サイ科の動物(Rhinocerotids)とシカ科の動物(Cervids)がある。馬圈溝遺跡は湖滨の河湖相堆積層中に形成され、基本的に原位置である。おそらく、ここはかつて石器粗加工場、そして臨時のキャンプサイトであったかもしれない。

半山遺跡は溝底遺跡の約40m西北に位置する。地理座標は、北緯40°13'34"、東経114°39'52"で、海拔857.77mである。遺跡は馬圈溝遺跡の上方で、両者の文化層最下面の垂直比高差は25.12m、地層厚度差は31.67mである。石器組成の特徴は、溝底遺跡のものに近い。その明確な違いは調整加工された石器が比較的多いことである。動物化石は、弁鰓類と魚類の少量の標本を除くと、その他はすべて哺乳動物の歯や骨格標本であり、化石資料は比較的破損している。鑑定できたものには、犬科の絶滅種(*Canis chihliensis*)、ゾウ科の動物(Elphantids)、ケサイ(*Coelodonta antiquitatis*)、サンメンバ(*Equus sanmeniensis*)とシカ科の動物(Cervids)がある。半山遺跡も古湖滨河流層沖積

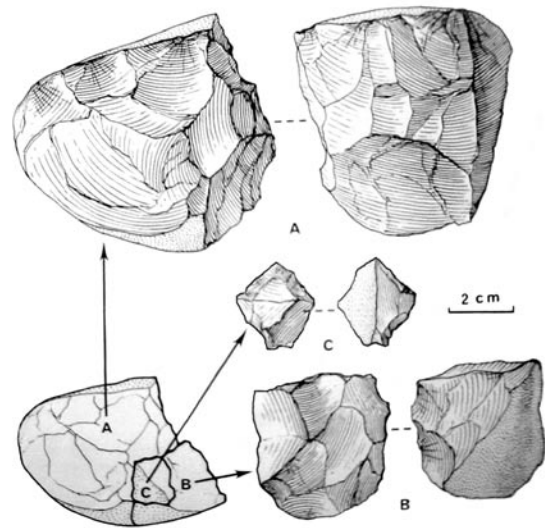


図2 溝底遺跡出土の接合資料

層中に存在し、岩相地層学の比較からこの地層は正断層下盤に位置する小長梁 (Xiaochangliang) 遺跡 (北緯 40° 13' 10"、東経 114° 39' 44") の層位に一致する。古地磁気測定では、松山逆転磁気期ジャラミロ・イベント堆積層の下方に相当する。

M c 遺跡は溝底遺跡の南側約 50 m に位置する。その文化層は溝底文化層と比べ約 3.4 m 高い。文化遺物は溝底や馬圈溝とあまり明確な差はない。面白いのはこの遺跡の文化層に多くの象の足跡が残っていたことである。

注目に値するのは溝底遺跡下方の地層である。朱日祥が古地磁気測定のためにサンプリングをしていたとき、溝底文化層の下、1.5 m、4.8 m、7.0 m のそれぞれの地層で、人工品とすることができる打製石器を発見した。これらの文化層は、暫定的に M e、M f、M g、そして M h と命名されている (表 1)。

溝底遺跡の発見は、以下のことを一層明らかにすることができる。泥河湾盆地は中国ひいては東アジアにおいて、更新世動物群だけでなく考古学的証拠においても疑いもなく資料的に非常に豊富な地域のひとつである。これにより、東アジアの旧石器時代研究は泥河湾盆地を理解することが必要となっている。更新世の泥河湾盆地は世界的に有名な東アフリカのオールドバイ渓谷に非常に類似した古環境の変遷過程を持っている。内容的にも匹敵することから、泥河湾盆地を東アジアのオールドバイ渓谷と称する人もいる。泥河湾盆地発見の旧石器時代遺跡はすべて明確な地形と地層がわかっており、遺跡編年を作成することができる。疑いもなく、泥河湾盆地は中国最古の文化発展と東アジアの早期人類の自然環境適応の研究において非常に重要な地域のひとつである。

中国において、かつて泥河湾盆地、河北省蔚県東窯子頭大南溝、安徽省繁昌県人字洞、重慶市巫山県龍骨坡で 200 万年前の人類の石器が発見された旨の報道があった。しかし、これらの地点で発見された石質標本は、あるものは人工的な性格が明確でなかったり、あるものは地層的根拠が不足していたりしており、これらの発見は考古学界ではいまだ共通認識に至っていない。一方、泥河湾盆地出土の早期人類の石器の性格ははっきりとしており、地層的根拠も明確で、事実上泥河湾盆地は東アジアにおける早期人類の生存モデル作成に大きな期待を抱かせる。異なる段階であっても、考古学的な証拠が代表する環境的相違、遺跡間の時空的関係、さらに埋蔵状況の相違は、なお一層の調査、発掘と地質学的作業によって解決する必要がある。しかしどちらにしても、溝底遺跡やその他の下部更新統泥河湾組の中から発見された遺跡は、東アジア最古の人類生存の根拠を確実に提供した。また人類が東アジアに占拠したのは 200 万年前よりも古くなることを暗示しており、泥河湾猿人の発見がすでにそう遠くないと期待している。

翻訳にあたっては、動物化石の和訳について、愛知教育大学の河村善也氏のお手を煩わせた。また、同志社大学松藤和人氏、藤野次史氏からは貴重なご意見を賜った。記して感謝したい。

表 1 泥河湾盆地馬圈溝一帯の下部更新統における考古遺跡の変遷

地 層		旧石器時代遺跡	古地磁気年代	
下部更新統	泥河湾組	上段	許家坡 霍家地 東谷坨A層 / 飛梁 / 後石山 / 麻地溝 A 層 東谷坨B層 / 麻地溝 B 層 東谷坨C-E 層 / 麻地溝 C 層 山神廟咀 半山 (Ma) / 仙台 / 小長梁 / 葡萄園 / 広梁	0.99-1.07myr 約 1.07myr > 1.07myr
		中段	馬圈溝 (Mb) / 洞溝 / 白女 Mc 溝底 (Md) Me Mf ? Mg	< 1.77myr
		下段	? Mh ? 大南溝	1.77-1.95myr ≈ 2myr

注：馬圈溝、Mc と溝底遺跡は、それぞれ馬圈溝 I、馬圈溝 II、馬圈溝 III の謝飛による別称がある。

## 第2回総会・シンポジウム

2004年12月18日(土)、12月19日(日)に東京都八王子市東京都立大学・講堂小ホールにおいて、第2回総会および記念講演、シンポジウム「石刃技法の展開と石材環境」が開催された。

総会は、18日の午前11時から開催された。議長選出、会長挨拶につづいて、各委員会の活動報告および新年度方針が説明され、了承された。次いで、会則の一部改正、会計決算報告、会計監査報告、新年度予算案および役員・会計監査委員・顧問選出規定についての説明があり、すべて了承され、総会は1時間あまりで終了した。

午後から、鈴木正男氏による記念講演「黒曜石は環境記録媒体である一特に産地推定の最近の動向について」の後、シンポジウムが開催された。まず、松藤和人氏により「石刃技法と石材環境をめぐって」と題して問題提起が行われた後、「石刃技法と石材」、「石刃技法の機能・行動論」という二つのテーマで基調報告が行われた。「石刃技法と石材」では、日本列島における石刃技法について、北海道白滝産黒曜石(木村英明)、東北産珪質頁岩(渡辺丈彦)、中部高地産黒曜石(大竹憲昭)の各石材原産地の様相を中心に報告され、西アジアから朝鮮半島、九州にいたるユーラシア大陸における石刃技法の様相、起源などに関して報告された(大沼克彦、西秋良宏、小畑弘己)。「石刃技法の機能・行動論」



では、石刃技法の機能論(阿部朝衛)、石刃技法期の遺跡構造(野口淳)、行動パターン(国武貞克)について報告された。また、各報告に対して10分程度のコメントが行われた。

討論会は2日目の午後から2時間あまりにわたり、基調報告を行った二つのテーマについて活発な議論が行われた。「石刃技法と石材」(司会:小野昭・松藤和人)では、まずユーラシア大陸における石刃技法の起源、拡散の問題が、西アジア、アルタイ・シベリア、モンゴルなどの研究状況が紹介されながら、年代観、技術系統論などの観点から検討された。次に、石刃技法を中心とした剥片剥離技術、石器器種と石質の関連について日本列島の例を中心に議論された。「石刃技法の機能・行動論」(司会:加藤博文・佐藤宏之)では、技能論、行動論的視点から、石核の共同保有、個人の癖・技量、石材の消費過程、素材生産・石器製作の分業など多岐にわたる問題が検討された。

最後に後期旧石器時代の石刃技法の特徴についてパネラーによって議論され、石器素材と刃器としての生産、石材の有効利用、素材の遠隔地の可搬性、素材・器種の企画性などの特徴が指摘された。

また、シンポジウムの休憩時間などを利用して、会場ロビーにおいてポスター・セッションが行われた。

## 2003 - 2004 年度活動報告

**総務委員会** 2003 - 2004 年度は4回の委員長会議を実施し、日程や議題などを調整した。入会申込書を簡略化し、日本考古学協会総会などで新期会員勧誘のために利用した。また、第2回総会等の開催準備を行った。これに関連して、総会議事資料の会計年度の変更案、日本旧石器学会役員・会計監査委員・顧問選挙規定案を作成した。

2004 - 2005 年度は、第3回総会・研究発表を2005年6月25・26日に明治大学におい

て開催する予定で準備を進めている。会員名簿の作成を検討したい。また、各地で開催されるシンポジウムなどの共催・後援、各国で開催される国際会議等への参加と日本旧石器学会の宣伝などを積極的に実施したい。

**会誌委員会** 2003 - 2004 年度は会誌の名称や構成内容、投稿規定・執筆要綱の原案を作成した。原案は役員会で検討され、会誌名は『旧石器研究』で、査読雑誌とすることとした。また、役員会での承認の後、原稿募集を会員に対して行った。原稿応募を2004年7月に締切り、創刊号は巻頭言1、総説1、原著論文5、研究ノート1、資料報告1、書評1、ポスターセッション報告6などで構成することとなった。2005年5月の日本考古学協会までには発行する予定である。

2004 - 2005 年度は会誌第2号を発行する予定であり、原稿の締切りは2005年9月30日である。会員諸氏の積極的な投稿をお願いしたい。

**ニューズレター委員会** 2003 - 2004 年度はニューズレター1号・2号を発行した。2号には李起吉氏に韓国新北遺跡の調査概要報告、木村英明会員に最近のシベリア・極東の研究動向を依頼した。今後も海外を含めた最新の調査、研究動向を掲載していく予定である。

2004 - 2005 年度はニューズレター3～5号を発行の予定である。

**渉外委員会** 2003 - 2004 年度は中国、韓国、ロシアの関係機関、関係者に日本旧石器学会設立の挨拶状を発表レジュメ集、ニューズレターなどとともに送付した。また、2004年6月に韓国・新北遺跡シンポジウムに委員数名、同年10月に中国・国際シンポジウムに松藤副会長が参加し、同じく、10月にはロシア・ノヴォシビルスクで小野渉外委員長が、関係者と東アジア旧石器学会設立に関する意見交換、情報収集を行った。

2004 - 2005 年度は国際的な研究交流や東アジア旧石器学会を運営する際の問題点などを

文章化し、日本側のガイドライン作成を具体化したい。また、海外の国際会議・シンポジウムなどの情報の収集し会員に広く伝達する予定である。

**研究企画委員会** 2003 - 2004 年度は2004年12月18・19日開催のシンポジウム「石刃技法と石材環境」企画原案を作成し、役員会での検討・承認の後、開催準備（発表依頼、シンポジウム予稿集の編集・刊行）ならびに当日の運営を行った。また、シンポジウム当日に実施したポスターセッションの開催準備を行った。

2004 - 2005 年度は2005年6月に研究発表（一般研究・遺跡調査報告）を中心とする形態に変更し、オーラルセッション、ポスターセッションを併用する予定である。また、ミニシンポジウムを開催する予定で、可能であればオプションでエクスカージョンを実施したい。

**データベース委員会** 2003 - 2004 年度は、データベースのフォーマット原案作成や都道府県責任者の選出などを行い、役員会で承認を得た後、都道府県責任者に作成依頼を2004年12月に発送した。データ作成の期限は2005年9月30日とした。事業を実施するにあたっては会員のみならず広く専門研究者に協力を依頼したい。また、データ作成はボランティアを基本とし、データベースの公開など事業全体に関わる特別経費は本学会が負担する。

2004 - 2005 年度は各地でデータ作成作業を進め、回収されたデータを基に順次データベースを構築していく予定である。

**会計委員会** 2003 - 2004 年度決算報告ならびに2004 - 2005 年度予算は以下に示すとおりである。2004 - 2005 年度は1年半を1年分の会費でまかなうため非常に厳しい予算となっている。新期会員の獲得が是非必要である。なお、会費未納会員について引き続き督促を行うが、未納者については2年目からは会誌などの無償配布を行わないことを役員会で申し合わせた。

## 日本旧石器学会 2003 - 2004 年度決算内訳

通常会計		収 入			単位：円
費 目	当初予算額	変更予算額	増 減		
1 会費収入					
会費収入	1,000,000	845,000	△ 155,000		2003 年度会費 169 名× 5,000 円
2 雑収入					
シンポジウム予稿集頒布代金	300,000	370,000	70,000		会員頒布 89 部× 2,000 円 =178,000 円 六一書房 1600 円× 120 部 = 192,000 円
雑収入	0	39,660	39,660		懇親会残金
小 計 ①	1,300,000	1,254,660	△ 45,340		
通常会計		支 出			単位：円
費 目	当初予算額	変更予算額	増 減		
1 一般事業費					
会議費	40,000	2,000	△ 38,000		役員会お茶代
旅費交通費	25,000	0	△ 25,000		
通信運搬費	160,000	132,930	△ 27,070		ニュースレター送料、諸通知、設立準備委員会・役員間連絡、他
消耗品費	25,000	54,287	29,287		事務用品、コピー、他
印刷製本費	120,000	101,325	△ 18,675		ニュースレター第 1 号、第 2 号
諸謝金	50,000	0	△ 50,000		
雑費	12,000	4,905	△ 7,095		原稿手数料、郵便局手数料、日本考古学協会卓借り上げ
予備費	205,000	0	△ 205,000		
2 シンポジウム					
会場設営費	55,000	49,840	△ 5,160		会場賃料、諸器具借用料
通信運搬費	48,000	16,900	△ 31,100		案内送付、発行者・設立準備委員会連絡、他
消耗品費	50,000	8,768	△ 41,232		事務用品、コピー、他
印刷製本費	350,000	336,000	△ 14,000		予稿集印刷
諸謝金	160,000	150,000	△ 10,000		後援者、発行者謝金
小 計 ②	1,300,000	856,955	△ 443,045		
小計①-小計②	0	397,705	397,705		次年度繰越

## 日本旧石器学会 2004 - 2005 年度予算内訳

通常会計		収 入			単位：円
費 目	予算額	前年度予算額	増 減		摘 要
1 会費収入					
会費収入	850,000	1,000,000	△ 150,000		(会員 170 名) × 5,000 円
2 雑収入					
会誌頒布代金	680,000		680,000		170 部 *4000 円 =680,000 円
ニュースレター頒布代金		90,000	△ 90,000		
シンポジウム予稿集頒布代金	280,000	275,000	5,000		会員頒布 80 部 *1,000 円 =80,000 円、一般頒布 120 部 *1,500 円 =180,000 円、2003 予稿集 10 部 *2,000 円 =20,000 円
前期繰越収支差額	397,705	0	397,705		
小 計 ①	2,207,705	1,365,000	842,705		
通常会計		支 出			単位：円
費 目	予算額	前年度予算額	増 減		摘 要
1 一般事業費					
会議費	42,000	40,000	2,000		役員会会議費、2005 年総会会場費、他
旅費交通費	10,000	25,000	△ 15,000		役員会交通費の臨時補填、他
通信運搬費	152,000	160,000	△ 8,000		会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、他
消耗品費	37,000	25,000	12,000		事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,108,000	120,000	988,000		会誌、ニュースレター、他
諸謝金	40,000	50,000	△ 10,000		臨時事務補助謝金、他
雑費	10,000	12,000	△ 2,000		雑費
予備費	397,705	270,000	127,705		2005 年総会時事業費、他
2 シンポジウム					
会場設営費	24,000	55,000	△ 31,000		会場備品、他
通信運搬費	24,000	48,000	△ 24,000		発行者・役員連絡、他
消耗品費	3,000	50,000	△ 47,000		事務用品、コピー、他
印刷製本費	210,000	350,000	△ 140,000		予稿集
謝金	150,000	160,000	△ 10,000		
小 計 ②	2,207,705	1,365,000	842,705		
小計①-小計②	0	0	0		

※増減欄の△印は減を示す

## 会則の一部改正・新規定の制定

## 会則 8 条の会計年度の変更について

10 月 - 9 月の会計年度は年度がまたがり、事業に対する計画、それに伴う事業実施・予算の執行等が難しく、日常的な慣習として多くの機関や研究会でも 4 月 - 3 月が会計年度であるなどの

理由から、会則第 8 条の変更を総会で提案し、了承された。

以下に、改正前と改正後の会則第 8 条を示す。

(改正前) 本会の運営に要する費用は、会費、寄付金、補助金をもってあてる。会計年度は 10 月 1 日に始まり、9 月 30 日に終わる。

(改正後) 本会の運営に要する費用は、会費、寄付金、補助金をもってあてる。会計年度は 4 月

1日に始まり、3月31日に終わる。

変更に伴う方向性

- ① 2003 - 2004年の予算の決算は9月30日で  
縮めて、会則通り監査を受ける。
- ② 6月頃に総会を開催できるようにする。
- ③ 2004年10月～2006年3月までの会費は  
2005年度会費とする。
- ④ 2006年4月からは単年度予算として計上する。

日本旧石器学会役員・会計監査委員・顧問選挙規定

1. 本規定は日本旧石器学会会則第6・7条に基づく。
2. 本規定は役員・会計監査委員・顧問の選出に  
ついて適用する。
3. 役員の数値は、日本旧石器学会会則第6条に  
よる。
4. 役員の任期は1期2年とし、3期以上は再任  
することができない。ただし本会発足から2期  
目の役員はもう1期(注)に限って再任するこ  
とができる。
5. 役員は会員の選挙によって選出される。会員  
は選挙権と被選挙権を有する。
6. 役員会から委嘱された選挙管理委員会は選挙  
管理委員長を互選し、委員長が事務を総括する。
7. 選挙は公示された日から2ヶ月をもって締め  
切られる。
8. 投票は無記名の10名連記とし、郵送によって  
行われる。
9. 北海道、東北、関東、中部、近畿、中四国、  
九州の7地区の上位得票者から役員を1名選出  
し、他15名を上位得票者数によって役員とする。
10. 会長は選出された役員から互選する。副会長  
は会長が役員の中から指名する。
11. 監査委員2名、顧問数名を会員から選出し、  
総会で承認を得る。
12. 在任期間中やむを得ない理由で役員に欠員を  
生じた場合は、(臨時)役員会の了承を経て次  
点の会員から補充される。

この規定は2004年度より実施する。なお、こ  
の規定の変更は総会の議決による。

(注) 2004年10月～2006年3月までを任期上の1年とする。

## お知らせ

### 第3回総会および研究発表

日本旧石器学会第2回総会・研究発表は  
2005年6月25(土)・26(日)に明治大  
学において開催いたします。詳細につきま  
しては、改めてお知らせいたします。

### 関連学会開催のお知らせ

石器文化研究会 シンポジウム

開催日：10月1日(土)・2日(日)

開催場所：かながわ県民センター

テーマ：『ナイフ形石器文化終末期』再考』

### 会費納入のお願い

日本旧石器学会会員の資格を得られた方  
でまだ会費を納めていない方は、同封の郵  
便振替用紙にて会費5,000円を速やかに  
納入して下さい。振込先は、日本旧石器学  
会 郵便振替番号00180-8-408055  
です。なお、2004年10月～2006年3  
月までの会費5000円を受け付けています  
のでよろしくお願ひします。

日本旧石器学会ニュースレター  
第3号

2005年1月31日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

安蒜政雄・藤野次史

発行：日本旧石器学会

事務局：愛知学院大学文学部白石研究室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 05617-3-1111～8(内線3247)

E-mail hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp